

愛がやってきた

丸山 勉

【聖書】 ルカによる福音書 15章 1～7節

徴税人や罪人が皆、話を聞こうとしてイエスに近寄って来た。すると、ファリサイ派の人々や律法学者たちは、「この人は罪人たちを迎えて、食事まで一緒にしている」と不平を言いだした。そこで、イエスは次のたとえを話された。「あなたがたの中に、百匹の羊を持っている人がいて、その一匹を見失ったとすれば、九十九匹を野原に残して、見失った一匹を見つけ出すまで捜し回らないだろうか。そして、見つけたら、喜んでその羊を担いで、家に帰り、友達や近所の人々を呼び集めて、『見失った羊を見つけたので、一緒に喜んでください』と言うであろう。言うておくが、このように、悔い改める一人の罪人については、悔い改める必要のない九十九人の正しい人についてよりも大きな喜びが天にある。」

【序】 母の日に

今日は「母の日」ということです。「母」という存在は、考えてみれば不思議な存在ではないかと思えます。私たちは例外なく、「母」から生まれているのですね。母は「命」を産みだす存在です。母にならない女性ももちろん沢山います。しかし、母から生まれなかった者はいません。その意味で、「母」と「命」というのは、密接なつながりを持っています。今日、「母の日」を覚えて、礼拝を捧げるということは、私たちのいのちを祝い、喜ぶことと結びついていることなのかもしれません。

【1】 見失った羊のたとえ話

今日は**イエス様のたとえ話**からメッセージをさせていただきます。イエス様のたとえ話の中でもとてもよく知られている話です。

百匹の羊を持っている羊飼いがいて、その中の一匹が見失われたとしたらどうするだろうか。この羊飼いは、この一匹を見つけるまで探し出す、と言うのですね。私たちはこのような話を聞くとホッとします。ああ、良かった！ と思えます。そしてイエス様はおっしゃるのです。あなた方の神様という方はそのようなお方なのですよ、と。

小さい頃、**迷子**になった経験のある方は思い出すのではないのでしょうか？ お父さん、或いはお母さんが自分を見つけてくれた時、もう、不安で不安で泣き出したくなる気持ちが、その瞬間、本当にホッと、嬉しくなって、その抱きしめてくれる腕の大きさを覚えているという方もいらっしゃると思います。その時にきっと、私たちは自分の「命」というものが、自分よりも大きい存在に守られている、ということ、理屈ではなく、体験するのでしょうかね。

このたとえ話の羊飼、「見つけ出すまで捜し回る」、そういう羊飼いです。でも考えてみたら大変なことです。どうやって捜すのでしょうか？ どこまで行ったか分かりません。GPS なんてありません。でもきっとその羊の名前を呼び続けるのではないのでしょうか？ そのいなくなった羊が羊飼いの呼び声に反応してくれることを信じて呼び続けるのではないのでしょうか？

主イエス・キリストは、私たちをどこまでも捜される神様の「足」です。また、私たちにあきらめることなく呼び続ける神様の「声」です。そして、私たちのか細い声、或いは泣く声、或いは叫びを聞き逃すことをしない神様の「耳」です。まことの羊飼いはそれらを備えて、私たち一人ひとりをもう一度、本来居る所に連れ戻して下さいなのです。

今日私たちは詩編 23 編の言葉も御一緒にお読みしました。「主は羊飼、わたしには何の欠けることがない。」——神様ご自身が私の羊飼としていて下さるので、私は満ち足りています、と言っています。でもこれは、自分自身を誇っていたら言えない言葉ですよ。自分の弱さを知っている人の信仰の言葉です。

このたとえ話ですが、誰に対して語られた言葉なのか、ということも重要だと思います。ファリサイ派の人々や律法学者たちに対してなのですね。一言で言うならば、この人々は、自分たちは熱心な信仰をもっている、神様のお眼鏡に適うと「自負」していた人々です。皮肉なことに、神様の律法を守ることに熱心な余り、自分自身を誇り、生ける神様との関係が失われてしまっていました。いつの間にか自分が神様になってしまっていました。主客転倒です。

その者たちに、イエス様は、羊と羊飼いの話をしたのです。「羊」というのは、まことに弱い、近視眼で迷いやすい、取るに足らない動物です。イエス様はこのたとえ話を通して、ファリサイ派の人々や律法学者たちに対して、あなたたちは自分が立派な人間だと思っているかもしれないが、実は迷い出た羊になっているのではないかと語られているのではないのでしょうか？

[2] ここに愛がある

ファリサイ派の人々や律法学者は自分たちが「羊」などとは思ったこともないと思います。そこのことこそが問題なのです。羊は洋服を着ていませんが、ファリサイ派の人々や律法学者たちは、洋服を何着も何着も着る人生を送ってきたのです。家柄、知識、名声、財産・持ち物……そういうものが彼らの存在を飾っていました。信仰とか律法とか言いながら、神様の憐れみの前に悔い改めるということを、それこそ「見失ってしまっ」たのです。迷子になっている自分に気付かない。

そして、イエス様が語られた、迷い出た一匹の羊を捜し出そうとする羊飼いの姿を聞いて、「それはあり得ないだろう」と思ったのではないのでしょうか。常識の声はこう言います。「そんな、いつ見つかるか分からない、いや、見つからないかもしれない一匹の羊のために時間を浪費するのは不合理だ。羊飼いとして、一匹いなくなったのは痛手だが、残りの羊を守る方がよほど責任をとることだ」。

このような考え方は、この世の中に普通にあると思います。「計算」をしてしまうのです。効率や合理性を考えます。また、そこにあるのは、そのひずみで排除される存在が出てても已む無し、としてしまうことです。言葉であからさまに言わないまでも「しょうがないよね」と片付けてしまうことが、私たちの世界、社会は多いのではないのでしょうか？

イエス様が語られた羊飼いは、「しょうがないよね」では終わらせません！「計算をしない」愚かな羊飼いの姿です。私たちの「常識」を超えた方なのです。しかも、この一匹の羊は、何故他の仲間の群れから離れてしまったのか、その「理由」については何ら語られておりません。「理由」などどうでもよいのです。今、目の前から、いるはずの存在が見失われてしまっているという現実、それだけで十分です。この現実を悲しみ、この一匹の、自分からは帰ってはこられない羊を、わたしは連れ帰るまで捜し出す。決してあきらまないで行動する。それこそが「愛」なのではないのでしょうか？

イエス様はある時、ご自分の周りにいる「群集が飼い主のいない羊のように弱り果て、打ちひしがれているのを見て、深く憐れまれた」とマタイ福音書 9:36 に書かれています。「憐れみ」というのは、単なる同情ではなく、自らのこととして痛むことです。どうして、ここまでなさるのでしょうか？——**私たちが神様の子どもだからです。「他人」ではないからです。私たちが失うことこそが、神様の痛みそのものだからです。**

イエス様は、私たちが本当に深く深く憐れんで下さるお方です。今日招きの聖句として読まれたヨハネの手紙一の 4:10 にはこう記されています。——**「わたしたちが神を愛したのではなく、神がわたしたちを愛して、わたしたちの罪を償ういけにえとして、御子をお遣わしになりました。ここに愛があります。」**

神様は、イエス様を通して、私たちが捜しに捜して下さいました。そしてどこまで行かれたかと言うと、**あの十字架の上まで行かれた、**と言うのです。私たちの神様への反抗ゆえ、受けなければならない裁きを、このお方が私に替わって受けて下さったのです。私たちが再び、**神様との真の親子関係**に生きることが出来るようになります。

そして今、復活されたイエス様は、聖霊によって、私たちと片時も離れないお方として共にいて下さっているのです。

最近、私はこんな光景をよく目にするのです。私は朝、FEBCに行く時に、駅からバスに乗らないで20分位なるべく歩くようにしているのですが、途中で**福祉作業所**があって、そこへ行こうとする多分20代の男性（恐らく**知的障害**をお持ちの方）がちょっと落ち着かない足どりで、けれどもやや早歩きで、私とすれ違うことがあります。ほぼ同じ時刻です。ああ、今日も作業所に向かっているんだな、と思っていましたと、その男性の数メートル後を、その男性の母親だと思いましたが、ご自分は自転車に乗って、その息子さんの歩行を後ろから、ゆっくりとあとを追っているのですね。今は年度初めだからなのでしょうか、彼の歩行（通所）をずっと見守っているのですね。その彼自身は、全く後ろを振り返りません。

ああ、**神様はこのお母さんのような方なのかもしれないな**、と思ったのです。息子さんは、お母さんが後ろから付いて来ていることを気に止めていないのかもしれないかもしれません。けれども、無事に通所が出来るようにサポートし、また何か危険があったら助けるのだと思います。**毎日**のように続いています。傍からみたら大変なことのようには思えますけれども、きっとお母さん、それを面倒なこととは思っておられないと思います。**息子さんと一緒に生きていることを喜びながらの「少し後ろからの同伴」**ではないかな、と思いました。

「自分の子ども」ですから、愛情と責任を持って導くのです。私たちも「神様の子ども」として頂きました！イエス・キリストが、自分から迷子になってさ迷ってしまう私たちを、連れ戻し、深い憐れみを持って、共にいて下さるのです。イエス・キリストは正に「**インマヌエル**」(神われらと共にいて下さる)なるお方です。

[結] この命は孤独ではない

私たちは、皆**イエス様に救って頂いた羊の一匹一匹**です。私たちが神様のもとに帰ってきた時に、**天では、喜びが起こっている**のですね。「羊飼いの囲い」とは、何か空間的なものと言うより、この**「天の喜び」という大きな囲い**ではないでしょうか？ それは**輪のような広がり**を持っていると思います。そして、皆が、この招きから漏れている者は一人もいないのです。

初めの話に戻りますと、「母」によって「命」が生まれると申しました。けれども、思えば、私たちは、自分が生まれてきた時のことを覚えていません。そして、自分の生涯の最後がどうなるのかも分かりません。**私たちの「命」は、その意味で、自分の手中にはない**のです。けれども、神様は、**たった一つしかない私の命を、まことの親である神様から離れて孤独になっ**てしまわないように、**たとえ離れても捜し求め、必ず見つけ出して下さるお方**なのです！この神様の愛が、確かに訪れたのです。イエス様によって！

私たちはいつでも、このお方のもとに立ち返ることが出来ます。そして、私たちもまた、お互い羊として、羊同士として、一匹一匹の存在を心に留めながら、祈り合いながら、労苦しなながら、与えられているこの交わりをさらに良きものとさせて頂きたいと思えます。

二つの聖書の言葉を読んでお祈り致します。

・イザヤ書 49 章 15 節「たとえ母が私を見捨てることがあっても たとえ、女たちが忘れようとも、わたしがあなたを忘れることは決してない。見よ、わたしはあなたをわたしの手のひらに刻み付ける。」

・詩編 23 編 6 節

「命のある限り恵みと慈しみはいつも私を追う。主の家にわたしは帰り、生涯そこにとどまるであろう」

お祈りをお捧げ致します。